

<書評>

千石英世著
『異性文学論——愛があるのに』
(ミネルヴァ書房、2004年)

松 本 和 也

「男が男の世界を描いた典型的な男性文学」(中村光夫)とも評される日・メルヴィル『白鯨』(上・下)の翻訳を上梓してから4年、千石英世が世に問うたのは、9人の日本の「新しい女性作家たち」を論じた『異性文学論——愛があるのに』であった。とはいえ、「ファルスの複層」(群像新人文学賞)以来小島信夫を論じ続けてきたことにも明らかなように、千石英世は本書においても「第三の新人や内向の世代と称される男性作家達」への「親和」を隠すことなく、むしろその理由を「物柔らかなその文体」に求め、いつしか本書でとりあげた「新しい女性作家たち」との共通項を語り出すだろう。そして、『白鯨のなかへ—メルヴィルの世界』を著しW・フォークナーを論じると同時に、日本の現代小説を同時代的に読んできた千石英世の焦点はといえば、「新しい女性作家たち」の小説にみられる「文体のなかに世界がゆらめき現象する」様相にあるようで、わけてもそれが「異性的」であることにこだわっているようだ。フェミニズム批評がゆきわたった今日、一定の配慮をしつつもそうした装い(またはフェミニズム批評的なものへの反発)をことさら前景化することなく、津島佑子・富岡多恵子・山本道子・大庭みな子・中沢けい・増田みず子・河野多恵子・川上弘美・村田喜代子の小説を論じた本書が、『女性文学論』ではなく『異性文学論』と題された所以はおそらくそのあたりに関わるのである

うし、千石英世の興味が制度的に固定された夫婦や恋愛ではなく、「他者の性」という函数のもとに生成変化していく関係の紋様にこそあったことを示唆しよう。

それにしても、千石英世の小説の読み方、というか接し方はやはり特異に思われる。1つには、いささかフェティッシュな趣さえ匂わせる文体への寄り添い方がある。単行本化に際して書き下ろされた「1 異性の荘厳——序にかえて」で明治以来の日本文学を論じる千石英世は、小栗風葉と徳田秋声を差異化する契機を両者の「文体」に見出すばかりでなく、自らが語る「本書をまとめる理由の一つ」を、先にあげた9人の「新しい女性作家たち」の小説が「文体をもった文学」であることをいうためだとしている。もう1つは、千石英世が『小島信夫 ファルスの複層』以来追求してきたテーマである小説と現実の関係である。「小説は予言的である」という評言が端的に示すように、千石英世は未来の現実と予言的に関わるものとして小説を捉え、さらには「小説を精読して批評することは、人間の現実について二度考えること」だとし、「一度目は小説が切開いて見せた現実のくるおしい姿」・「二度目は小説が切開いて見せなかった静謐な現実の姿」とその内実を語っては、抜き差しならぬ現実との関わりにおいて小説を読もうとするだろう。

こうしたスタンスから千石英世は、「新しい女性作家たち」の小説＝文体を、性と家族といったモチーフ／テーマに即して読み解いていく。（ここにいうモチーフとは作者によって選ばとられたもの、テーマとは、作者が「小説作者らしく」書くことで生き直すものだとされる）「新しい女性作家たち」がそれぞれの文体を駆使して描き出す世界で、その作中人物たちは必ずしも近代的な諸制度に抗うわけではないが、その網目を逃れた地点で性愛は倒錯的な様相を帯び、家族や夫婦は明確な破綻もないままに溶解し、その果てには死と狂気の影が明滅している。もちろん、現実には誰かが死ぬわけでも発狂するわけでもないが、千石英世は小説に散見される、例えば「自殺という文字」などに堪えがたいほどの「禍々し」さを感じ、その文体を恐れ、ついには文体のむこうに「新しい女性作家たち」の生々しいまでに現実的な「顔」を見出しているかのようだ。この時千石英世は、ほとんど批評的距離を放擲しており、文芸評論という自らの筆＝文体＝身体（性）において、「新しい女性作家たち」が描き出す物語に身を投げ出し、体ごと共振し、小説に描かれた危機を生き直す。「10 甘嚙みのユートピア——川上弘美、ジェンダーの異界」で、「川上弘美の作品は、全て性愛をテーマとしている」と断じる千石英世は、「それゆえ、精神分

析学の語彙と精神分析学系フェミニズムの語調で解説されるのは当たらずといえども遠からず、とはいえ、それは解説であり分析であるにすぎない。作品の魅力に成り代わるわけではない。作品の表層の魅力こそが作品のエロスであることは言を俟たない。」と続け、小説の「魅力」を遠ざける「分析」や「解説」を極力排しながら、「表層」の「エロス」に身を委ねていく。従って、「読むということは、読まれるべき事柄そのことに、読みながら化身を遂げて行くということだった」と千石英世が『異性文学論』に書きつけた言葉こそは、そのまま自身の方法論ならぬ小説への淫し方の表明に他なるまい。それでも／だからこそ、千石英世はこう言い切ってみせるのだ——「小説は今日においてなお試みるに値する」と。こうした確信を前に、『異性文学論』を手にした読者もまた、その文体のむこうに千石英世の「顔」を垣間見ることになるだろう。